
綾鷹

猫離脱

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾鷹

【Nコード】

N1573D

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

綾と鷹の話なんだけど。女心と秋の空ってところかな。

1 .

なんだかおちつかないのです
なんでも捨てて捨てて捨てきりたい

といったメールがたまたま携帯のメールに入ってきた。
件名がR e : なんだけど登録している誰でもなくいつ誰に送った当
てもなかった。ちょうどそのとき旅行先で歩き疲れたばくは地元の
子供らが犬なんかを連れて通う小さな公園のベンチで休んでいた。
当時つきあっていた彼女からのメールを日々心待ちにしていた自分
としてはあやしくとも複雑に考えず人ごとだと知ってか知らず寛大
にR e : を付け足してやった。

2 .

旅行から戻ると彼女から別れをきりだされた。
夜遅くに空港から戻り部屋に入るためドアの前で荷物を置きポケッ
トの中の鍵を探っている最中だった。
すごく短いんだろう。文章はよく繋がった。これまでの気持ちだか
期待だか二人の未来への展望だかに比べれば目の覚めるような明確
さだった。

ああいいな。いい気持ちだ。いい気持ちの伝わりようだった。いい
ニュースもいつもこれくらい伝わればなと思った。

3 .

ありがとうございます。がんばってください。

なんて送ったつけ。

だって、受信歴は残っているのに送信歴は消しちゃったから。そうでしょう、自分の発言に責任を持つのは大事だけど時々みたくないのも自分の言葉として残ってる。最後の受信と送信は基本的にいつも残しているんだけど消してるってことは自分では振り返って見たくないことだったんだろう。

で、これでした。レレレのはずの件名はまた Re：になっていたのをぼくは見逃せばいいのに発見していた。

誰だよ。べいべい。

かまっている暇はあるけど、気分もあるんだ。

さあ、やり直しだ。すべてはうまくいく。を心がけに振られたってへっちゃらちゃらの月曜日の目覚ましがぼくを起こす前に仕込まれていたメールだった。

4 .

結論がでていることをあーだこーだといっても始まらないが終わらせたくはないのが心情だった。これまでなら素直に引き下がっていたらう。しかしちよつと変えてみた。とりあえず会って話そうなんて決まり切った文句をつけ彼女と会うことにした。

待ち合わせのガーデンカフェは朝からでもいや朝にこそふさわしいと踏んでいるところだったけどしぶしぶなんだろうが彼女が待ち合わせで自分より早く来ているのを初めて見つけた。初めてが終わりかという間もなく彼女が席を立ち出ましようと言った。

5 .

銀杏並木が黄色く昨日あたり落ちて雨に濡れた扇が黒の厚底で何回ももみくちやにされすり切れていった。そこは電話ボックスのあとだろうか空間がまだ薄く街の雑踏が緩和されていた。そんなところからのメールなんだろう。あなたは誰と問い合わせた。

6 .

誰だつてうまく説明なんてできない。わかつてほしいと思うだけだしわかったつもりになるだけだ。彼女は向き合うのをさけたのだった。隣に座り同じ方向に進んでいた。その電車は同じ処をぐるぐる廻りだした。ぼくも彼女もそれをあらかじめしっていた。ぼそつぼそつと単語が連なりだした。それは駅に着くたびだったり、快速で一つ飛びだつたりした。そんなことをしたくてそうしたのだった。別れたくてわかれるのだった。

7 .

） 一般論の一般さ加減について ）

卒業論文 NO 5421839

生きていることに落ち着かず執拗に椅子から立ち上がりまた座りを繰り返していた。あらゆる窓が風と光を流し込んでいるのに時計の針を気にしてしまう。

この時間の一部にあらがうくせにこの世界の一部に安寧としているのに。

使命など不自由などまっぴらなくせに、お前は嘘かまことか。

どうなつてもいいと始めた事業はそのために崩壊した。どうこうも

せづただ黙っているだけでそれでいいというくせに将来を見据えて何か始めなければとも思う。

またどうでもいいなんて始めるつもりか自問する。でもどうしようもない。何かがうまく行く時はいくしかないときはいかない。ありとあらゆる対策が講じられても隙は出来、あるいはそれゆえに隙ができるのさなんて馬鹿な物言い。大きなマイナスを抱えたやつがいてそれをプラスだと信じていることができて大洪水のように皆皆巻き込んで。上から下までももちろんやつはそのときの上にいるのさ。当然だろって顔している。

椅子から立ち上がり煙草の包みを開けてまた座る。

ただ通り過ぎるのを眺めている。鴉の鳴くのを聞いている。もっと早起きすれば小鳥たちの囀りなんだ。わずかばかりの遅れが細部を狂わせていく歯車となる。

コーラの栓を開けてふ抜けた機関銃にガスを詰めて栓をしようとしている。

部屋の床に仰向けになる。何もみたくない。目を閉じる。何も聞きたくない。音を消す。

ここが今。ここが今すべて。過去を思い出したくはない。一年昔だろうが一日だろうが一時間だろうが。

明日を迎えたくはない。問題が山積みだ。

8 .

常に心ここに在らず。

身一つ飛べぬならせめて新雲を掴む。

ぼくは彼女の夢を見なかった。

会えば会ったで終わり。別れれば彼女の顔も面影も思い出すことがなかった。

9 .

ここにいるのは誰だ

二匹の蛇がいてレースをしている

ゴールラインを割りそうなのはA蛇

Bはまだライン手前

さて最終的にB蛇が尻尾までラインを超えたときA蛇はまだライン上にその腹を乗せているだけだった。

勝ったのはどっち

10 .

彼女はあなたがわたしにやったことよと言った。

F I N

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1573d/>

綾鷹

2010年11月21日03時41分発行